

老健 ひょうご

(一社)兵庫県介護老人保健施設協会機関誌



2015.September

第34号

第26回 全国介護老人保健施設大会 神奈川 in 横浜

去る平成二十七年九月二日(水)〜四日(金)、「高齢者が輝く未来へ お洒落に！スマートな連携！」をテーマに、神奈川県横浜市に五四〇〇人を超える老健施設の仲間(関係者含)が参集、盛大に開催されました。

開会式の表彰式では、厚生労働大臣表彰にマリア・ヴィラの理事長・施設長の舞原節子氏、全老健会長表彰(個人)に多可赤十字老健介護係長・松本泰明氏、岩手大会優秀奨励賞を緑寿苑・遠藤佳孝氏の「老健で求められるリハビリの役割と課題」(左記参照)が受賞し、表彰されました。また、奨励賞に五演題選ばれました。

大会には本県から一五〇余名が参加。本県四十二題を含む一三五六題の演題(口述・ポスター)発表では、老健施設の理念である在宅復帰関係をはじめ、各現場での様々な取り組みを発表。会場によっては入りきれないほどのところもある中、参加者はメモを取ったり、質問をしていました。また、今回も当県から四名の方に口述並びにポスター発表の座長として大会の進行に、一役担っていただきました。



▲受賞者(左から) 遠藤氏、舞原氏、松本氏

次回大会は、平成二十八年九月十四日から三日間、「大阪府大阪市」にて開催されます。

近畿での開催です。是非当県からも多くの参加と発表を期待します。

「座長として大会に参加して」

ライフ明海 事務長 山田 泰嗣



「全国介護老人保健施設大会 神奈川 in 横浜」に参加し、初めて座長を務めさせていただきました。私は「業務改善と効率化」のセッションを担当しましたが、当施設においても課題の分野でもあり、思わず傾きながら興味深く進行させていただきました。発表時間が限定されており、タイムキーパーという課せられた任務を意識しながらフロアーからの質問を期待しておりましたが、積極的な質問・意見を引出すことができなかつたことは、反省事項であります。座長からの質問には発表者の方々は真摯に答えてくださいましたので、質疑応答により発表内容を更に深く理解することができました。また、「座長」という貴重な経験のチャンスを与えていただきました事務局にも感謝申し上げます。

今大会において、厚生労働省・三浦公嗣老健局長が講演で示されたように、「在宅復帰・在宅療養支援機能の充実」を視野に、①多職種協働により在宅・医療・介護を一体的に提供する体制に取り組む。②医療・介護の連携強化の方向。等、施設サービス提供側には相当な覚悟と意識改革が求められる厳しい内容で、身の引き締まる思いがしました。

口演に関しては、強化型・加算型を取得済みの施設の戦略や加算型を維持する苦労等の報告から多くを学び、また、介護人材不足の継続的状況下で、地域包括ケアの使命達成の為に、今後の老健運営は、役職者をはじめ多職種一致団結しての運営無くしては成し得ないことを痛感し、大きい・重い宿題を持ち帰ることになりました。

当施設からの発表は、看護・介護分野に参加し、また、それぞれの立場・職種において、様々な知識を吸収させていただきました。この大会参加の何よりのメリットは、

同じ仕事をし、同じ悩みを持つ仲間が全国にいるという**一体感**を再認識できることです。老健は従前より云われている通り、多職種協働の専門職の集団です。日々の業務はそれぞれ異なっても、全員の中の心には、「**老健の役割とは何か?**」という共通のキーワードが常に存在しています。

私は、老健が取り組む「在宅復帰から看取りまで」の幅広い機能を認識する一方、運営を取り巻く環境の厳しさが増す状況下において、悩みを共有し、知恵(打開策のヒント)を授かり、勇気をも与えられる機会が、この全国大会であると受け止めています。

今回は大阪です。是非、積極的に参加しましょう！

大会の様子



黒岩神奈川県知事・祝辞



小泉達次郎氏による介護応援メッセージ



座長をした山田氏の会場でも...



会場に入りきれず廊下で...



ポスター発表の様子



次回大会のPRの様子

のコミュニケーションを充分に行うことで円滑に行っていることでした。

二施設とも共通していることは、ひとつのチームとして協働しケアを統一、生活支援をしているということでした。高齢者の方々には難しく、やり辛いことは日常的に沢山あります。できることは何か、どこを補えばできるようになるのかなど、いか等の見極めが必要です。多職種で連携を図っていくことで利用者の個々に合ったサービス提供に繋がっていくのではと感じました。今回の研修で、自分が気付かなかったこと、学んだこと等を周りのスタッフに伝え、利用者へのより良いケアの実践に努めていきたいと思います。

(ハイマート・北村 裕香)

シルビス大磯は、個室が四十四床と多く、個室代が二、三〇円の設定には驚いた。各部署の名前プレートにはカバーがついており、個人情報の管理もされているのが印象に残る。歯科治療室・理容室の充実ぶりには驚くばかりであった。職種別に分かかれの懇談では支援相談員から、周りには老健も多く、一週間以内に入所の返事をし、在宅の可能性がある入所者は家人に初日、一週間、二ヶ月、二ヶ月、三ヶ月と途中途切れることもなくまめに家人と話し合う。現場ではワールドタイム(排泄・食事介助)には、リハビリの職員もケアワーカーと全く同じ業務に入る。ケアワーカーもまた利用者と一緒にリハビリに入る。などの話が特に印象に残る。



▲ 歯科治療室

フラワーコート江南では、入ってすぐの「昭和の品物の展示コーナー」、ケアワーカーとナースも同じカジュアル的な服などが特に印象に残る。また、介助方法、リハビリだけで終わるのではなく、職員の身を守るケア・リハビリ介助の仕方をアドバイス。職員は「明るく元気」をモットーにし、どうしてもおとなしい職員は、挨拶だけでもきちんとするよう指導。リハを拒否する利用者には無理にはしない、リハの楽しさ、職員

と仲良くなるなど工夫している。併設特養があり、在宅復帰は少ないが、昨年十月から取り組みはじめ加算型へ移行。意識の統一、トップダウンではなく、自分たちで何ができるのかを考えてもらう。共働きの家族の多い地域、介護力の余地がありそれでも少しの可能性があれば徐々に様子を見ながら検討する。畑で取れたものを持ち寄り、みんなが参加しておやつ作り。などの取り組みが印象に残る。

(ライフ明海・谷本 安隆)

今回視察させていただいた二施設からはいろんなことを学ばせていただきました。

まず、シルビス大磯では、「連携」(部門内・他部門・病院と老健・地域)がしっかり取られていました。他部門では、フロアリハビリと共同リハビリというシステムを導入し、他職種との情報をしっかり行う。病院や老健などでリハビリ職員がこまめに異動し、それぞれの連携が取りやすい環境を整える。六十五歳以上の介護認定を受けておられない方々の施設利用を勧め、地域との連携を図るなどです。自施設でも取り入れられるところは取り入れていきたいと思います。

次に、フラワーコート江南では、「設備の充実」を見せていただきました。まず、何と云ってもリハビリ室が広いです。そして、ウォーターベッドなど最新の機械がたくさん導入されていました。また、ロッキングベッドやスライドボードなど福祉用具の充実とそれらの活用もすっかりされていました。あと、「利用者の状態を評価するだけでなく、介助者の評価をする」という言葉を聞いてハッとしました。このような意識が薄



▲ シルビス大磯にて

かったからです。そして、このような福祉用具ももっと積極的に取り入れていかなければならないと学ばせていただきました。

昨年も参加しましたが、今回もこの研修で多くのことを学ばせていただきました。学んだ内容をしっかりと自施設に持ち帰り、自施設をより良くするために行動していきたいと思えます。貴重な経験を積ませていただいております。

(さんなん桜の里・大成 恵美)

フラワーコート江南にて

